

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ジャコモ・レオパルディとその時代 ③

ピエトロ・ジョルダーニ

國司 航祐

詩人ジャコモ・レオパルディ(1798-1837)は、幼少のころから人並外れた才能を発揮していた。弱冠 13 歳にしてホラティウスの『詩について』をイタリア語の 8 行詩に翻訳したという逸話一つとっても、彼の才能がいかに常人離れしたものであったかがよく分かる。突出した才能はときに他人を寄せ付けないものであるが、レオパルディの場合もそうであった。とりわけ、中部イタリアの小村レカナーティに幼少期を過ごしたレオパルディが周りとうまく人間関係を築けていたとは考えにくい。現にレオパルディは、折に触れて、故郷レカナーティをくさすような発言をしている。著名な詩「思い出」(*Le ricordanze*)の中で、レカナーティを「野蛮な生まれ故郷 natio borgo selvaggio」と称したことはよく知られている。

そんなレオパルディにも、ピエトロ・ジョルダーニ(1774-1848)という理解者がいた。ジョルダーニは、レオパルディの 20 歳以上年上の文人である。レオパルディと同様に多くの苦悩を抱えて青春期を過ごしたジョルダーニは、一種の現実逃避の手段として、ベネディクト会サン・シスト修道院に入る。1797 年、彼が 25 歳の時のことある。だが、もともと教会の権威的な体制に嫌悪感を抱いていたジョルダーニは、修道院における生活を通じて教会に対する反発をかえって強めてしまい、結果、1800 年に始まったナポレオンの第 2 次イタリア遠征の機に乗じて、修道院から逃亡することになる。当時のジョルダーニは、教会の保守主義よりナポレオンの自由主義に共鳴していたのである。



【ピエトロ・ジョルダーニの肖像】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Pietro_Giordani

1807 年から 1809 年にかけて、ジョルダーニは一連のナポレオン頌を發表する。そのうちの一つ『立法者ナポレオン』(*Napoleone legislatore*)という題に表されているように、ジョルダーニにとって、ナポレオンは軍人として以上に近代法の制定者として偉大な人物であったようだ。ちなみに、ナポレオン帝政下に制定された法律には、イタリア各地に様々な反応を引き起こしたものがあつた。中でも有名なのは、死体埋葬に関する新法に対

して文豪ウーゴ・フォスコロが示した文学的な反発であろう。死体埋葬に関する新法とはすなわち、1) 墓地は町を囲む城壁の外に作られること、2) 身分の差異に関わらず、墓石の大きさは全て同じであること、の2点を命じた法律である。これは、衛生上の問題を解決しつつ、同時に人類の平等という概念を法制の中に盛り込もうとするものであり、フランス革命の精神を具現化する法だと言えよう。しかしフォスコロは、その代表作『墳墓』(*Dei sepolcri*)の中でこの法令に対する反論を表した。墓地は偉大な先人と生者をつなぐ重要な役割を果たすものだ、と主張したのである。



【ウーゴ・フォスコロの肖像】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Ugo_Foscolo

ジョルダーニに話を戻そう。彼は、1810年代前半に行った芸術に関する一連の講演(1810年の「カノーヴァ頌」が最も有名)をきっかけに、イタリアにおける新古典主義の推進者の一人として認知されるようになる。そして1816年、雑誌《イタリア図書館》(《Biblioteca Italiana》)の創刊に携わり、自らがイタリア語に翻訳したスタール夫人の論文「翻訳の方法と有益性」(*Sulla maniera e la utilità delle traduzioni*)をその創刊号に掲載した。スタール夫人はそこで次のように主張する。

すなわち、イタリア文学は偉大な伝統を有するが、その伝統の重みゆえに古色蒼然としたものになっており、新たな要素を取り入れてそうした現状から脱却するためにはイギリスやドイツの文学を翻訳する必要がある、というのである。スタール夫人のこの過激なメッセージは、当時のイタリアの文壇に大きな論争を引き起こした。すなわち、スタール夫人の見解を是とするロマン派と、それに異論を唱えた新古典派との間の論争である。この論文を紹介した張本人ジョルダーニは、直後に自らの論文を《イタリア図書館》誌上に発表し、その中でスタール夫人の提案を退けつつイタリア文学は「イタリア」の古典を貴ぶべきだと論じている。

さて、レオパルディのジョルダーニとの交流が始まったのは、この時期のことである。既にイタリアの文壇の中心的な存在となっていたジョルダーニに対して、レオパルディはまだ田舎町に住む一介の文学青年に過ぎなかった。だが、突出した才能ゆえに理解者を欠いていたレオパルディは、文壇の重鎮たちにそれを求めざるをえなかった。1817年、父の仲介により本屋を営むステツラという人物と知り合い、彼の協力で『アエネーイス』第2巻のイタリア語訳を刊行した。そして、この初めての出版物を名刺代わりに、レオパルディは文壇の重鎮たちに接触する。すなわち、詩人ヴィンチエンツォ・モンティ、文献学者アンジェロ・マーイ、そしてジョルダーニに相次いで手紙を送ったのである。以下に掲げるのは、1817年2月21日にレオパルディがジョルダーニに初めて送った手紙の拙訳である。

1817年2月21日 レカナートにて
ミラノ在住 ピエトロ・ジョルダーニ様

文学において中流であることを強く憎む私は——といひながら、私が自分自身を憎むことがないのは、私が文学の最下流に位置するからです——、イタリアではあなた以外に2、3名としか言葉を交わす気になれません。だいが前からあなたに手紙を書こうと思っていたのですが、結局一度もその勇気が持てませんでした。今になってやっと、ステツラ氏が私の名前であなたに寄贈するこ

とになる本が出版されたこの機会に乗じて、恐れを抱きつつも手紙をお送りします。なによりまず、あなたに手紙を送り、そこに著書という重荷を付け加えるという恐れ多き行為をお許ください。そして、感情を害することによって私の罪を責めないでいただきたいのです。その本自体が私の惨めさを露わにして、私を苛むのですから。私がこの本に関する感想をあなたに求めることなど、神が許してはなりません。私はできる限り誠実に述べます。私と同様に他の多くの人にも生じているこのことを、あなたは既によくご存知かもしれませんが、私は、いかなる作品についても、たとえ 20 人の文学者の見解を知っていたとしたとしても、あなたのご意見を聞かない限り何も知らないと考える人間なのです。そして私は、他の 100 の人間の賞賛よりあなたの一言の批判の方が遥かに価値のあるものだということを知らないほど愚かではありません。しかし、批判するためであれ、本は読まなければならないでしょう。大量の拙劣な韻文を読むことは、真の文学者にとっては堪えがたい苦痛に違いありません。もし、私の惨めなこの贈り物を拒まないというご厚意に与れるのであれば、私は時折、そのことを思い出しては、私の本をあなたに受け取っていただいたと自慢げに語るようになるでしょう。そして、いま一つあなたにお願いをすることが許されるのであれば、尊敬してやまないご主人様、私を恭順かつ献身的な下僕としていつまでもあなたに仕えさせていただけませんか。

なんともまあ仰々しい文面である。へりくだり方が常軌を逸しているので、筆者には滑稽にすら見える。とはいえ、自分のことを知らない相手にいきなり手紙を書くのだから、レオパルディもさぞかし気に病んだことだろう。筆者も大学院生だった頃、イタリアの著名な研究者に教えを乞うため、突然メールを送ったことが何度もあった。その際は、どのような文面にすべきかいつも大変悩んだものである。相手の心証を害さないように丁寧かつ簡潔な言葉遣いを心がけつつも、自分の研究者としての能力をアピールしようとしてある程度装飾に富んだ文体を採用していた記憶がある。レオパルディの手紙も、ある意味では文壇デビューのファー

スト・ステップだったはずだ。中身以上に文体を重視していたといっても、あながち間違いではないだろう。

そもそも、手紙、あるいは書簡は、西洋文化において特殊な位置を占めるものである。新約聖書の一部は書簡であり、キケローやペトルルカの書簡集は一種の文学作品として読み継がれている。さらに、レオパルディの生きた時代には、『若きウエルテルの悩み』に代表されるような書簡体小説が流行していた(前掲のフォスコロの代表作『ヤーコポ・オルティスの最後の手紙』も書簡体小説である)。一通の手紙とはいえ、レオパルディはこれをいい加減に書くわけにはいかなかったはずである。

何はともあれ、レオパルディが 1817 年 2 月に送った一通の手紙によって、彼とジョルダニの美しい友情関係が始まった。レオパルディは自身の理解者としてジョルダニを敬愛し、ジョルダニはイタリア文学界に待望の天才詩人としてレオパルディに惚れ込んだ。実のところ、レオパルディの生前の評価は決して芳しいものではなかったから、彼を正当に評価し続けたジョルダニの存在はレオパルディにとって極めて重要なものだったはずである。文芸批評家ピエトロ・チターティは、レオパルディのジョルダニに対する感情を「愛」と呼んだ。もしこの「愛」がなかったとしたら、レオパルディは詩を書き続けることができなかったかもしれない。不朽の名作たちの陰には、一つの友情物語があったのである。

<参考文献>

- Giacomo Leopardi, *Lettere*, Milano, Mondadori, 2015.
Pietro Citati, *Leopardi*, Milano, Mondadori, 2016.
Adriano Bon, *Invito alla lettura di Leopardi*, 1985, Milano, Mursia.
Giusepp Monsagrati, *GIORDANI*, Pietro, in *Dizionario Biografico degli Italiani*, vol. 55, Istituto della Enciclopedia Italiana, 2001 (http://www.treccani.it/enciclopedia/pietro-giordani_%28Dizionario-Biografico%29/)

(京都外国語大学講師)

根付くということ

谷口 和久

これまでイタリア自転車旅をしてきて一番驚いたことといえば、モルティローロ峠の斜度のきつさでもガヴィア峠のえんえんと続く坂道でもなく、またコモ湖やガルダ湖の週末ライダーの多さでもなかった。

では、何が一番の驚きだったかというところ、スーパーマーケットで自転車雑誌が普通に売られていることであった。それも1誌だけでなく、4誌も。

郊外のなんてことのないごく普通のスーパーで、ファッション誌やゴシップ誌それにサッカー誌などと並んで、いたって当たり前顔をして自転車レースやヴィンテージ自転車の雑誌が並んでいたのである。

そういえば、レジのおばちゃんも当たり前顔をして、自転車雑誌を買う東洋人に接してくれた。

さすがにサッカー誌には数で負けていたものの、それでも一定数の講読者数が見込めなければ、これほどの冊数が流通することもないだろう。しかもヴィンテージ自転車の雑誌など、いったい誰が読むやねん！？とつっこみたくなるマニアックな品ぞろえである。

簡単に紹介すると、「CICLISMO」(左上)は総合誌で、プロレースから機材まで幅広い内容。「Bicicletta」(右上)はコアなアマチュア向けのようで、アマチュア向けレースやトレーニングなどが主な内容となっている。「TUTTO BICI」(左下)はプロレース情報主体で、おっかけファン向けか。「Biciclette d'epoca」(右下)はヴィンテージ自転車の雑誌。レストア情報なども充実していて、単に鑑賞するだけでなく実際に乗り回したいという人たちのニーズにも対応している。イタリアでは「エロイカ L'Eroica」(Eroica は英雄の意)といって、ヴィンテージ車で未舗装の道を走る、回顧主義的サイクリスト向けの大会も行われている。

雑誌の傾向がいろいろと分かれているということは、ターゲットとなるサイクリスト市場も同様に分かれていて、しかもそれぞれ雑誌が売れるだけの市場規模があるということだ。日本でいくら自転車がブームになりつつあるとはいえ、まだまだ考えられないことだ。

10年ほど前にツール・ド・フランスを見に、フランスを訪れたことがある。山岳地帯のレースを何日かハシゴしてきたが、まだ陽が登る前にホテルを出発し、コースの麓でバスを降りて山道を登っていく毎日だった。そうしないと、選手たちが通過する何時間も前にコースが封鎖されるので、観戦ポイントにたどりつけないのだ。

何キロも坂道を登って、適当なところでレースを待つことにする。選手たちがやってくるのはまだまだ数時間も先というのに、周りにはすでに何グループもの観客が三々五々と待っている。

その顔ぶれというと、自転車を趣味としているような、いかにも自転車乗りといった風体の人のごくひとにぎりで、大半はごく普通のおっちゃん・おばちゃん、あるいは家族連れといった雰囲気。7月に行われるツールは、まさにフランスのバカンスシーズンの風物詩である。



【スーパーで売られていた自転車雑誌】

そんな彼らは、レース以上に、選手たちが通過する1時間ほど前にやってくる「キャラバン・カー」がお目当てだ。これは何かというと、ツールのスポンサー企業が出している宣伝カーで、お菓子や販促物などの自社製品を沿道の観客たちに配ってくれるのである。グッズがばらまかれると、大人も子供も関係なく取り合いになって、その盛り上がりはレース以上だ。

実際、本番のレースで盛り上がっているのは一部のコアなファンくらいで、大半の観客たちはまるで祇園祭の山鉾巡行でも見物しているような風情で選手たちを眺めているのである。

そもそもレースで盛り上がるような激しいアタック合戦などそう頻繁にあるわけでもなく、あったとしてもトップ争いをしているひとにぎりの選手たちだけだ。ほとんどの選手たちは淡々と目の前を通り過ぎていく。



【淡々と通過する選手たち】

当時(2000年代前半)はアメリカ人選手ランス・アームストロングの全盛期で、アメリカの応援団がフランスの地に大勢押しかけてきていた。彼らは必ずといっていいほど星条旗を手にしたり、ランスのチームのウェアを着ていたりするので、はたから見てもすぐわかるのである。そんなアメリカ人たちに対し、ヨーロッパ人たちは、祇園や嵐山にあふれかえるインバウンド客を眺める京都人のような視線を送りつけていた。

さて、スーパーでの雑誌販売といい、ツールの観客といい、「ごく普通」がキーワードだ。自転車レースが、ごく普通の生活に根付いている。

「ヨーロッパでは、自転車は文化である」。

よく言われるフレーズである。では、「文化」とはなんぞや、である。

ひるがえって日本に置き換えると、例えば相撲が「国技」とよばれ、日本文化のひとつとみなされている。日本人であれば誰でも知っているし、テレビで取組を目にしたたり、ニュースを耳にしたたりしているものだ。これは、実際にその競技をやったことのあるなしに関わらずで、むしろ家や学校で遊び半分で作るのを別にすれば、実際に土俵に上がって相撲をしたことのある人なぞ、ごくひとにぎりだろう。

社会的認知があること。そしてリスペクトがあること。これが「文化」とみなされる所以だろう。(昨今の相撲協会の不祥事はとりあえず置いておいて)。

言うは易しだが、築き上げるには一朝一夕というわけにはいかない。歴史の積み重ねと、社会的に受け入れられるための活動、ことに情報発信が大切であろう。

かの地での自転車レースを考えると、対比としていつも思い浮かべるのが、日本の駅伝だ。とくにテレビ中継についてである。

正月はたいていテレビで駅伝中継を見ているのだが、箱根駅伝の盛り上がりに対し、元旦の実業団駅伝のさみしいこと。

レースの質でいえば、実業団の方が格上のはずだが、この格差はなにゆえか？全国からよりすぐったトップレベルの大会が、一地方の学生団体の大会に圧倒的な差をつけられているのである。野球でいえば、プロ野球が東京六大学野球の後塵を拝しているようなものだ。

まずひとつには歴史の違いというものもあるのかもしれないが、それでも実業団の方も1957年の創設からすでに60年以上続いているのである。(箱根駅伝は1920年創設)。

あるいは、開催地の違いも格差の要因だろうか。箱根駅伝が都心からスタートして湘南や箱根といった人気スポットを通るのに対し、実業団駅伝は群馬の片田舎だ。

とはいえ箱根駅伝も、30年ほど前に筆者の知人が箱根方面に観戦に行っていたころの話を聞く

と、今ほどの混雑ぶりでもなく、これだけの人気を博すようになってきたのは、やはりテレビ中継が大々的に行われるようになってからのようだ。ちなみに日本テレビが箱根駅伝の全国ネット放映を始めたのが1987年である。

ただ、全国ネットの放映ということでは、実業団駅伝も同条件だ。視聴率を見てみると、実業団駅伝の12.4%に対し、箱根駅伝は29.7%と、圧倒的な差だ(数字はいずれも2018年、ビデオリサーチ調べ)。これほどの差はどこから生まれるのだろうか？

個人的見解だが、これはコースの景観と、それを活かした映像の力が大きいのではないだろうか。

都心から湘南の海岸に出て海沿いを走り、箱根の山に突入していく。選手の目指す先には常に富士山が控えている。その映像を、地上から、山上から、そして上空からと、さまざまな変化をつけて、選手たちの走りとともに届けてくれる。

選手の走りもさることながら、スペクタクルに富んだ映像を視聴者は求めているのではないだろうか。そんな素晴らしい舞台に実際に足を運んで生で観戦したいと願うのは、自然な流れだろう。

ヨーロッパの自転車レースでも、アルプスやドロミテなどの山岳地帯、地中海や大西洋などの海辺の景色、ローマやパリなどの歴史ある街並み等々、素晴らしい景観をこれでもかと届けてくれる。

あたかも「景観の力は国力に比例する」とでもいわんばかりに、自転車レースの映像を通じて、自国の素晴らしさを世界に発信している。ここで言う国力とは、もちろんGDPや軍事力といった次元の低い話ではない。

そして、箱根駅伝でもそうだが、ツールやジロでも必ずといっていいほど過去の歴史的な名場面の映像を流している。

時代を彩った名選手たちの、時には華々しく、時には過酷な戦いの様子をアーカイブとして見せることで、先人たちに対するリスペクトをあらわし、ひいては視聴者にもレースに対するリスペクトを植え付けるのだ。

[参考文献]

Daniele Marchesini, *L'Italia del Giro d'Italia*, il Mulino, 2009
『ツール・ド・フランスを知るための100の入り口』(Naco 著、八重洲出版、2013)
『ツール・ド・フランス100回グレートヒストリー』(フランソワーズ・ラジェ他著、宮本あさか訳、八重洲出版、2013)
wikipedia 関連情報

(当館スタッフ)

～イタリアイベントご紹介～

チンチン電車で巡る イタリア各州ワインの旅 ～南イタリア編～

路面電車で揺られながら、イタリア各州の郷土料理とその地方のワインとのマリージュを楽しめるイベントが、大阪谷町四丁目のイタリアレストラン、ベアートとワインインポーターのアルコトレード・トラストの企画で開催されます。お時間ある方はぜひ足を運んでみてください。(詳細はベアート田中シェフに直接お問合せください)

- ・日時: 7月22日(日)
- ・集合時刻: 17:30
- ・集合場所: 阿倍野近鉄百貨店前 歩道橋2階
- ・運行経路: 天王寺～浜寺～我孫子道～天王寺
- ・参加費: 6,800円(税込)
※イタリアンコース、グラスワイン4杯
- ・問合せ・申込先: ベアート 06-6943-6090

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/